

ターミナルケアにおけるソーシャルワーカーが担うアドボカシーの役割

- ナラティブ・アプローチの視点に立った実践に基づいて -

東洋英和女学院大学大学院博士後期課程 遠藤紀子 (7998)

〔キーワード〕ターミナルケア、ナラティブ・アプローチ、アドボカシー

1. 研究目的

本発表の目的は、ソーシャルワーカーがターミナルケアに関わる時に担うアドボカシーとしての役割について、事例研究によって明らかにすることである。発表者は、ターミナル期にある人たちの支援に関わっている。日々の実践の中で考えたことは、人は死が近づくと、動くことや話すことが困難になり、訴える力を持たなくなるということである。亡くなった人から援助内容の評価を聞くことも不可能であり、援助者側が自ら安心し、満足できるような死の形を押し付けてしまう危険性もはらんでいる。パターンリズムの起きやすい構造になっているのである。それゆえに、利用者に対し、ソーシャルワークの基本的機能であるアドボカシーの役割を果たすことは、重要な課題ではないかと考えられる。この課題について、ナラティブ・アプローチの視点から検討する。

2. 研究の視点および方法

ナラティブ・アプローチは、医療・看護・心理・福祉などの臨床領域における新たな実践的方法として注目されている。その理論的背景の一つに社会構成主義がある。ある現実が客観的に存在するのではなく、そこに関わる人の相互作用を通して、社会的に構成されるということである。ナラティブ・アプローチは語り（ナラティブ）によって現実を理解していく方法であるといえる。ナラティブ・アプローチは、これまでの実証的な研究方法ではなく、具体性や個別性を重視する。専門職が客観的に利用者を観察し、既製のスケールにあてはめて評価するのではなく、互いの関係性と相互作用によって新しい物語をともに作り上げていくことを重視している。この視点は、アドボカシーの可能性を示唆するものではないかと考えている。

ここではまず、アドボカシーの概念とナラティブ・アプローチについての先行研究を概観し、両者の関係性について考察する。それらをふまえ、発表者の経験した事例を報告し、ナラティブ・アプローチの視点で関わることによって、ターミナル期を迎える人のアドボカシーのあり方について検討する。

3. 倫理的配慮

事例対象者は故人であるが、事例研究にあたって以下の倫理的配慮を行ったうえ、東洋英和女学院大学大学院の倫理審査を受け、承認を得ている。事例対象者の個人情報はずべて匿名化し、本人と特定できないようにする。事例本来の持つ意味内容を損なわない程度の加工を施す。生前、研究発表をすることに対して本人からの承諾を得ている。事例対象者の家族等の関係者の個人情報は扱わない。施設利用者を研究対象とすることに対し、勤務先所属長の承諾を得ている。

4. 研究結果

アドボカシーは「権利擁護」と訳されることが多い。特に社会福祉に契約の概念が導入された後、判断能力に欠ける人たちの権利を守るために、アドボカシーの重要性が議論されるようになってきた。アドボカシーは、当事者の自己決定を支え、代弁や代行を行い、生活をよりよいものに改善していくことが強調されている。しかしながら、代弁や代行が多すぎると、当事者の力を疎外してしまうこと、そのような行為そのものが当事者から自己決定能力を奪い、当事者をパワーレスにさせてしまうという指摘もある。一方、アドボカシーを生活支援という広い概念でとらえ、当事者性を重視し、傍らにいてその人を支えることと捉える考え方もある。権利を獲得するという姿勢ではなく、当事者の同伴者的な姿勢が、この概念には含まれる。

ナラティブ・アプローチは、当事者と専門職の間にある力関係の問題を踏まえて、専門性への懐疑を示し、当事者の物語を重視し、当事者の生き方から学ぶという姿勢を大切にしている。当事者がこれまで生きてきた関係性と歴史から意味を見出していくこと、専門職主体の援助理論に依存することなく、当事者との共同作業で新しい物語を作り出すことをめざしている。

事例でとりあげたAさんは、医療的処置を望まず、最期まで自分の考えを通した人だった。Aさんに対しては、その語る言葉と生き方に敬意を示し、語るができなくなった最期の時も、Aさんがこれまで語ってきたことを尊重するように支援した。当事者こそ自分自身のことをわかっている専門家であり、その語りから意味を見出すということは、当事者の最善の利益が何であるかを知らうとすることでもある。社会福祉は社会的に弱い、あるいは不利益を被る立場にいる人たちを対象としてきた。当事者の声を真摯に受け止めることの大切さは、今日強調されていることである。ナラティブ・アプローチで重視されている視点は、単に傾聴の大切さの主張ではなく、当事者の声からリアリティを見出していくことであり、その姿勢がアドボカシーにつながるのではないかと考えている。